



毒

母

虫

IV

IMAGE by PPK
Written by Doujimayu

毒虫Ⅳ

「もう、マレーシア全然しっかりしてないじゃない」と私は、午後の四時に学校から帰っていつものようにシャワーを浴びようと思ったら、水が使えないことに気付いてげんなりしながら毒虫に言った。

「ふうむ、これはまさに予想外だったな」と毒虫も苦笑して答える。

「まさか、雨が二ヶ月も降らないとはねえ」と毒虫は部屋の窓に近づいて、恨めしそうに空を見ながら言った。空はむかつくほどの晴天で、どこをどうしても雨など一滴も降りそうにない感じ。

「これだとお店（メイドカフェ）もやってられないじゃない」

「まあ、一日水が出ないわけじゃないんだから、なんとかなるだろう」と毒虫は疲れた声で言った。幸いにして今日はお店の定休日だったので私はほっとする。毒虫の説明では朝と夜だけ水がお情けで出るらしい。その間に水を溜めておけば、お店でも使えるのだからまあ安心といったところか。

ここマレーシアの首都、クアラルンプールに
来てそろそろ一年がとうとうとしている。東京よ
りは結構ましな夏が過ぎ、雨が多いけど超快適
な冬を楽しみ、季節は春に向かっていている。春と
いっても一年を通して雨季と乾期しかないここ
では、あまり春の実感なぞない。というか一切
ない。ただ、雨が降るといきなり気温は下がっ
て快適になり、降らないと気温が下がらず空気
は乾燥してだんだん喉が痛くなる。さらに熱帯
夜が続くと（でも東京のより全然ましだが）、
不眠で学校の授業に集中できなくなることもあ
るくらいだ。

東京の空気が綺麗だと思ったことはあまりな
かったけど、こっちの雨が降らない乾燥した空
気の不快さに比べたらかなりましだった（と今
は思う）。どこからかやって来るヘイズとよば
れる不快な煙が街をつつみ、町の風景は霞みが
かかったように見える。ヘイズは遠く南にある
インドネシアのほうから、焼畑で発生した煙が
やって来るってのが定説にはなっている。しか
しこの説明は結構あやしい。インドネシアにも
っと接近しているジョホールバルという南側の

都市よりも、このクアラルンプールのほうが被害は大きいのだから。つまり本当の原因はよく分からないみたいだ。毒虫はただの環境汚染かもしれないと、言っている。

「シャワーがないけど、水はあるぞ」と毒虫はいつのまにか買ってきたのか、巨大な緑色のバケツを指差して言った。中には水がたっぷりと入っている。

「おお、いつのまに用意したの。気がきくね」と私はほっとして言った。気温はかるく三十度は超えていてシャワーを浴びないと、不快でやりきれないのだ。

「まあ、取水制限を始めるって噂は、前からあったんだよな」と毒虫はやれやれといった表情でいった。

「OK、じゃあこれを身体にかけるよ」と私はシャワールームのドアを閉じようとした。するとそれを右手で押さえて、毒虫が何気ない顔でするりと入ってくる。いつのまにか裸になっているのが不気味だ。

「な、なに、邪魔しないでよね」と私はうんざりして言った。毒虫のセクハラはまあいつもの

ことだが、こんな明るいうちからやられるとちよつと困ってしまふ。学校から戻ってきたばかりで脳みそがまだ学生モードから切り替わっていないんだから。別にHなことは嫌いじゃないんだけど……。

「ふぐ、ふあ、む、ぐ、むむ」と入り口で躊躇っている私をいきなり正面から抱きしめて、毒虫がキスしてきた。そしてキスをし終わると奴は当たり前のように、私のTシャツを脱がし始める。相手にこうやって考える間を与えないで、どんどんアクションを仕掛けるのはヤクザとホストの常套手段なのかもしれぬ。まあ、私はいつものことなので、とくに抵抗はしないけど。

ただ相変わらず旺盛な、毒虫の性欲にちよつと感心してしまう。二十三歳の義父は、まだまだあつちの方は元気一杯みたいだ。それが、私にとっていいことなんだか、悪いことなんだか……よく分からない。あんまり考えたくもない。私はしびしび空っぽの浴槽の縁に腰掛けた。毒虫も私の隣に腰を下ろす。

「結構残りもんのケーキ食べているのにお前って、太らないなあ」と感心するように言いながら毒虫は、私の自慢のクビレに両腕を回してきた。もうブラは剥ぎ取られて、不安定な脂肪の塊が二つ、私の顎の下に無防備にぶら下がっている。Dカップからちよつとずつ健気に成長している、発展途上の私のおっぱい。毒虫がいつのまにか後ろから乙女の乳を優しくもみ始める。「う、なにするのよ」と不意をつかれて私は思わず悲鳴をあげる。

「甲斐がそうやって魅力的だから、俺もケーキ作りに打ち込めるよ」と毒虫は爽やかな声で言いながら、娘の乳房を両手で熱心にマッサージしている。

「……体型維持するのに必死で努力しているんですよ、知らないのパパ」と私はいいながら、毒虫の不埒な手の動きを抑え込もうとするが、逆にこっちの手が押さえ込まれてしまう。やっぱり女は非力ですね。

「まあ俺も一緒にケーキを食べて太ってないんだから、公平といえど公平だけだな」といいながら、毒虫は私のおっぱいから手を離して、空

の浴槽の中に入って、タオルで私の背中を擦りだした。

毒虫もお腹はちゃんと筋肉で割れている。毎日ジムで五キロ走っているから、まあその努力はすごい。でも毒虫が醜いただの虫になったら、私だって頻繁にHさせてあげるか分からない。いや、永遠にさせてあげないかも……（いくら学費を出して貰っていてもね）。雌を発情させることができるからこそ、毒虫は危険で魅力的な毒虫なんだと思う。

「カフェってやっていて楽しいけど、たまにケーキが余って無理して食べると太っちゃうよね」と私は毒虫に言った。

「まあ、お前は育ち盛りなんだから、そんなに体重は気にしなくていいんじゃないの」と言いながら毒虫はタオルを背中の上のほうから下に向かって丹念に擦り始めた。

「ね、ねえ、夕方からそんな気合入れて洗ってくれなくていいよ」と私は困惑して義父に言った。

「え、そうか」

「そうだよ。夜になったらシャワーが使えるんでしょ？」

「ああ、そうだよ」とぼけた声で答える毒虫。

「じゃあ、夜また洗うからさあ。もう出よう

よ」と私は声を尖らせて言った。宿題があるから、本当はこんなことやっている場合じゃない。

「相変わらずおっぱいは大人並みなのに、お尻は少年みたいだな」と私の言葉を無視して毒虫は、お尻のほうを熱心に洗いはじめた。私はなんだか赤ちゃんみたいに、身体を磨かれている楽チンさが気に入って、出て行く機会を逃してしまう。

「パパはお尻でかい子が好きなの？ そんなことないよね」と言いながら私は、目の前の壁にたてかけてある大きな鏡を見ながら言った。Hな毒虫が全身をよく見えるようにと買ってきた変態アイテムだ。

この鏡でどれだけ私は、義父に身体を弄られる自分の姿を見せ付けられたことだろう。でも、この鏡があるから……私は体型に敏感でいられるのかもしれない。

「体型気にするなってパパは言うけど、こんな大きな鏡あると普通は気にするよね」

「そうか、そういう効果があるんだなあ……風呂場の鏡ってのは」と毒虫はとぼけて言った（どうせ私のダイエット効果もちゃんと計算して買ってきたはずだ）。相変わらず奴の手は、私のお尻の上をクルクルと、熱心に回転している。少しくすぐったくて、私はお尻をもぞもぞさせる。

「ところで、甲斐、この間の英語のテストだけどなあ」と毒虫は私の右腕を上げさせて、敏感な脇の辺りをタオルで擦りながら、面倒臭い話をしてくる。タオルは軽く触れるか触れないかのソフトタッチで、時々おっぱいの周辺にも触れてくる。なんだか物凄いHな気分させられた。いつのまにか私の股間の芯が潤んできたみたいで、私はわけもなく太ももに力をいれてアソコを閉じる。

「……あ、ごめん。ちよつと春のテストはひどい点数だったよね」と私は慌てて言った。先週

春のテストの結果が出て、数学や歴史は高得点だったけど、英語はあんまり良くなかった。

「英語の前に中国語を最初に習ったからかなあ」と私は馬鹿な言い訳をしてみました。

「お前ねえ、そんな言い逃れが通用すると思ってるのか」と刑事みたいなことを言いながら、毒虫が力をこめて私の背中の肩甲骨の辺りをゴシゴシ擦りだした。もうなんでこんなに熱心に、夕方から私の肌を磨きたがるんだろう。この変態義父はついに明日、奴隷市場に私を売りにでも行くんだろうか……。

「でもそんな、滅茶苦茶ひどい点数じゃないでしょう」そう私の英語の成績はクラスで真ん中くらいだ。日本人にしては頑張っているほうだと自分では思っているんだけど……。

「甲斐はいつか英語で、国際的な仕事をする人間になって欲しいんだよ」と毒虫は真剣な親の顔つきで、ピシリと言ってくるのだ。娘を裸にして湯浴みさせながら、そういう真面目な話をするのが毒虫の厄介で、トリッキーなところだ。

どこまでがプレイでどこまでが、リアルな説教なのか本当に判断が難しい。

「そ、そんな怖い顔で睨まないでよね、パパ」と私は引き攣った笑顔を浮かべて言った。毒虫のホスト時代に貯金したお金で、高いインターナショナル・スクールに通わせてもらっているというひげ目があるから。

「よし、今からどれだけ英単語を知っているかテストするからな」と毒虫はヘラヘラ笑いながらなんだか不気味なことを言い出す。

「へ、どういうこと」と私はなんだか悪い予感がして、思わず発展途上のおっぱいを両腕で隠した。

「だからここで、英単語の勉強しようって言うてんだよ」何か問題ある？って顔で毒虫はしれっと言った。

「な、なんでパパは、そ、そういう変態的なことしか思いつかないわけ」と私は、毒虫の提案を聞きながらため息をつく。何が悲しくて浴室で素っ裸になって、父親と英単語の勉強なんてしなくちゃいけないんだ。この不埒な義父はイ

スラムの法に基づいて、今すぐ目をくり抜かれるべきだ。

「それは俺が教育熱心だって、誉めているんだよな」とほざきながら、毒虫は自分の鬼畜計画に満足そうに微笑む。

「……本当にあんたって頭があれだよな、テング熱（東南アジアで蚊を媒介にして流行っている病気）にでもかかっちゃっているんじゃない」

「この間のリテラチャー（英文学）のテストで単語のスペルミスが結構あっただろう、ここで特訓だよ甲斐ちゃん」

この男は狂っている。本当に狂っている……。まあ予想通りの展開ではあるんだけど。

「じゃあ、最初の単語は p r e d i c t i o n（プリディクション）だな」

「……えええと、あれ、聞いたことあるなあ。でも意味なんだっけ」と私は腕組みして必死で思い出そうとする。

「五秒カウント。5、4、3、2、1、0……
はい、終了」と毒虫の意地悪な声が、シャワー
ルームに無情に響きわたる。

「そ、そのカウントなんか早くない」と私が慌
てて抗議して言う

「どうせ、知らない単語は、いくら考えても出
てこないだろう」といって毒虫は、胡散臭い教
師面をしながら

「prediction（プリディクション）
は予言とか予知って意味がある」と言った。

「……はあい、ちゃんと覚えます」と私はやる
気のない声で言った。すると

「……でも、英単語のスペルは書いて覚えるの
が……一番だからなあ」とまた不気味なことを
言い出す。

「シャワールームで、どうやって単語書くの
よ」と私がイライラして言う

「ちよつと待ってる」といって何かを思いつい
たのか、毒虫は楽しそうに外を出て行った。私
はもう沢山だと思って慌てて、シャワー室から
逃げだそうとする。ところが手になにかペンの
ようなものをもった毒虫が、予想外の早さで戻
ってきて出口を塞いでしまった。

「な、なによ、それ」

「これは単語を勉強する最高のアイテムだよ」といいながら、当たり前のようにペンを私に持たせた。

「た、ただのペンみたいだけど」

「これはフェイス・ペイント用の特別なペンなんだよ」それを聞いて私の悪い予感はずマックスレベルになっていた。

「さ、書いて単語を覚えようぜ」

「ど、どこに」と私は顔を青ざめながら聞いた。

「もちろんお前の身体にだよ」と義父はあっさりど、最悪の単語勉強方法を私に告げる。

「……」私は絶句して、奴の顔をしばらく呆然と眺めていた。好奇心で少年のように目を輝かす義父の毒虫。その笑顔を見ていると、何が正しくて何が正しくないのかが、段々分からなくなってくる。まるで海辺に築かれた砂のお城が波に飲み込まれていくみたいに、信じていた何か崩れさっていく恐怖（というの少し大げさだが……）。

「どうせ、この展開予想してたんだろう。You predicted this would happen」と毒虫が有難い例文をレクチャーしてくれる。娘を素っ裸にして、何をやっているんだろう……この男は。

「はあ、身体のどこに書けばいいの」と私はけだるく、ペンを空中に持ち上げて言った。もう抵抗しても無駄なことは分かっている。毒虫のこういう暴走は、奴が私の体内に射精するまでおさまりはしないのだ（もちろんコンドームは付けてくれるけど……）。

「好きなところに描けばいいよ」と毒虫はまるで、デッサンをすすめる絵画教師のように、明るく前向きに言っただけ。

「単語のスペルを教えてよ」と私は暗い声で言った。

「p·r·e·d·i·c·t·i·o·n」と毒虫がゆっくりスペルを言うのを聞きながら私は、マジックで自分の太ももにその単語を書いてみた。幸い水分は蒸発して、私の皮膚にマジックの文字はにじむことはなかった。まるで

紅い蚯蚓腫れのように、禍々しい文字が私の白い肌の上に刻み込まれる。

「いいなあ、前衛アートみたいだよ」と毒虫が惚れ惚れした表情で、私の太ももを撫でながら言った。

「本当に、日本を代表する……く、屑だね、パパっで」と私は軽蔑をこめて、唸るように低い声で言うてみた。しかし、奴は井の頭公園で、花見をする人のような、太平の顔つきでニコニコ頷くばかりだ。